
メルロ＝ポンティの「セザンヌの懷疑」における精神分析

井ノ上薫（早稲田大学）

精神分析は理論と実践の両面で芸術に影響を与えてきた。ポール・セザンヌ研究においても、シオドア・レフやメイヤー・シャピロなどの精神分析の知見を活かしたセザンヌ解釈がひとつの潮流を成している。

モーリス・メルロ＝ポンティがセザンヌについて主題的に論じた「セザンヌの懷疑」(1945)もまた精神分析と無縁ではない。メルロ＝ポンティはこのテキストで、ジークムント・フロイトによる精神分析の見地からのレオナルド・ダ・ヴィンチ論である『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の思い出』(1910)を解釈し、画家の生とその絵の関係という問題に対する自身の立場を示している。では、このフロイトのレオナルド論の解釈とそこから導かれる画家の生と絵の関係とはどのようなものか。

メルロ＝ポンティは『行動の構造』(1942)や『知覚の現象学』(1945)などで精神分析を批判的に検討しながら自身の哲学を練り上げており、精神分析の重要性は澤田哲生など多数の研究者が指摘するとおりである。本発表が主題とするフロイトのレオナルド論を解釈する箇所は、1940年代頃のメルロ＝ポンティが自身の芸術論に精神分析をいかに取り入れたのかを示す貴重な例である。また、この箇所で扱われる画家の生と絵の関係という問題は、芸術論における主要な問題のひとつと言えるだろう。

「セザンヌの懷疑」はメルロ＝ポンティの現象学と関連させて論じられることが多い。例えば、このテキストをガレン・ジョンソンはエトムント・フッサールの現象学と比較しながら検討し、ジュディス・グラツァー・ヴェクスラーは現象学的考察としてセザンヌ受容史の中に位置づけている。本発表の意義は、現象学という文脈で論じられてきた1940年代頃のメルロ＝ポンティの芸術論を、精神分析の受容という観点から芸術論の歴史の中に位置づけなおす糸口になる点にある。また、本発表と同じくフロイトのレオナルド論を扱う先行研究には岩崎陽子や川崎唯史の論考がある。共に『知覚の現象学』の精神分析に関する議論の考察を中心とし、フロイトのレオナルド論へのメルロ＝ポンティの解釈自体を詳細に検討してはいない。対して本発表では、フロイトのテキストを参照しながらこの箇所を検討し、メルロ＝ポンティの具体的なフロイト解釈を考察する。この考察は、メルロ＝ポンティとフロイトの主張の相違をより明瞭にし、先行研究を補完するだろう。

本発表の構成は次のとおりである。まず、『知覚の現象学』を中心とする精神分析に関する議論から、性は行動を規定しないが行動から事後的に見出されると、メルロ＝ポンティは考えていることを示す。次に、フロイトのレオナルド論を参照しながら、そのメルロ＝ポンティによる解釈を検討する。そして、メルロ＝ポンティは画家の生によって絵が説明されるのではなく、絵を通じて画家の生が見出されると考えていることを明らかにする。